

克典

bitch volume 3

呑み屋にふらりと入ってきた一見の若いカナとホテルへしけ込む
僥倖に恵まれ、圭祐は有頂天になっていた。

カナは拙かったものの若さが七難を隠した。

ちいさな死から、のろのろと復活した。

久々に若い女の肉体を堪能し、両切りタバコをふかしながら、若
かりし頃に思いを馳せたりしていた。

カナが啜り泣いているのに気づいた。

簡単に引っ掛けられたのはあるいは失恋直後だったのかもしれない。
い。

索然としながら、カナが落ち着くのを待った。

「ごめんなさい……でもいいの。私、AV女優だから」

え

不用意に身動ぎしたせいで啜っていたタバコの灰が落ちた。

しかも、お父さんに売られたの……

圭祐はカナの父親と対峙した。

血の繋がっている若い娘をAVプロダクションに売ったという事
前情報からは連想できない、いかにも折り目正しそうな人物だった。

「何故なんだ？」

「何がですか」

ラブホテル

飲食店

「カナをAVプロダクションに売り込んだって」

父親は即答しなかった。

圭祐が呼び水を打った。

「ひよつとしてカナの産みのかあちゃんにハメられてできた子だったとか？」

啞然として、ややあつて、父親は笑いながらかぶりを振った。

「……カナが新卒でAVメーカーから内定取ってきたんです」

今度は圭祐が啞然とする番だった。

「手塩に掛けて育てた娘がAVに出演するのは厭ですが、それよりも『AV女優ではなくAVメーカーに勤務する』という方がよっぽど厭だったんです。

狡いじゃないですか。他の女の子に躰張らせてじぶんはそれを売り捌くなんて」

いつか圭祐の表情は、父親の述懐に潜むものを汲みとるのに集中しているそれに変化していた。

「就職がなければ、フリーターでも家事手伝いでもよかったです。選りに選って、AVに出演する覚悟もないのにAVメーカー。」

育て方を間違えました」

我が子の既遂の悪戯を目撃したかのように、父親は、眼を伏せ苦笑交じりにかぶりを振った。

その笑みは、同席者の圭祐を気遣った愛想笑いだった。事と次第によってはシメると決めていた圭祐だったが、その件についてけりはついた。

今度は圭祐が同席者を気遣う番だったが、打つ手を探しあぐねているうちに時間切れとなった。

克典

bitch volume 3